論文要旨

ナムイ語ゾロ方言の記述言語学的研究

西田文信

本論文の目的は、中華人民共和国四川省涼山彝族自治州冕寧県連合郷で話されているナムイ語ゾロ（冕寧）方言を対象言語とし、包括的な記述を試みることである。

四川省西部を南北に縦断するように複雑な地形が連なる山岳地帯は、その歴史的・民族的な背景から、中国の民族学者費孝通によって「川西民族走廊」と名付けられた。この地域は古来より多くの民族が移動を繰り返し、さまざまな少数民族が集住している。現在この地域は、主にチベット族・羌族・彝族が多く居住しているが、以上のような背景に絡んで多くの少数言語が存在する。その中で、川西民族走廊に分布するチベット＝ビルマ系少数言語をまとめて「川西走廊諸語」と呼ぶ。ナムイ語も川西走廊諸語のひとつであり、話者人口は3000人とされている。川西走廊諸語はシナ＝チベット語族、チベット＝ビルマ語派、羌語支の言語であり、Qiang（羌語）、Primi (普米語)、Muya (木雅語)、rGyalrong (嘉戎語)、 Ergong (爾龔語)、Shixing (史興語)、Ersu (爾蘇語)、Guiqiong (貴瓊語)、Zhaba (柴巴語)、Lawurong (拉坞戎語) 、Choyo（却域語）また死語であるTangut (西夏語)も当該語支に含まれる。

ナムイ語に関する研究は、中国の言語学者により断片的なものが公表されているのみで、音韻・形態・統語に関する体系的な記述的研究は、これまで全く発表されていない。民話や語彙等も出版されているが、記述に問題点が散見される。本論文は、ナムイ語の全体像を慶名することを目指し、歴史的背景や社会言語学的背景も含め、可能な限り多くの現象について触れつつ網羅的な記述を行った。論文の本体は、文法記述、更に付録として親族名称の一覧、テキスト、語彙集を巻末に収録した。

本論文で用いるナムイ語のデータは、全て筆者自身のフィールドワークで得たものである。フィールドワークは 2004 年 9 月から 2013 年 8 月にわたり四川省涼山彝族自治州冕寧県連合郷にて断続的に行った。主要コンサルタントは、1978 年連合郷生まれのナムイ＝チベット族の女性（1983 年生）である。

本記述言語学的研究は、単に一言語の研究にとどまらず、これまでわずかしか存在しなかった川西走廊諸語の言語学的資料として、川西走廊諸語の比較言語学的研究、または言語学の諸理論の研究にも貢献するものであると考える。

第一章「序論」では、本論文での議論を展開するにあたっての基本的な事項の説明や定義を行う。本論文で扱うナムイ語の系統的位置づけや話者の置かれた社会状況などについて概説した。

第二章「音論」では、ナムイ語の音声記述・音素体系を記述し、音声、音素、超分節音

素について分析結果を提示した。特に 4 つのトーン及び語声調（word tone）の振る舞いについては詳細に記述した。

第三章「名詞形態論」では、先ず形態論レベルの現象を記述した。ナムイ語における形態論的現象には、接辞による派生、複合、繰り返し(reduplication) による派生がある。接辞による派生、複合、繰り返しによる派生を扱った。続いて用いる品詞分類と分類の基準を示した後、名詞や名詞句に関連する文法現象についての議論、あるいは、名詞句に付く助詞の記述を行う。まず名詞句の構造を記述し、名詞の下位範疇の一つである代名詞について論じ、やはり名詞の下位範疇の一つである数詞および助数名詞について論じた。また様々な格標識を記述する。

第四章「動詞形態論」では、ナムイ語の基本的語順を示し、さらに、本論文で用いる様々な概念の定義を行った。引き続き、動詞や動詞句に関連する文法現象についての議論、あるいは、動詞に付く助詞の記述を行った。ナムイ語は膠着語で SOV の語順を有する。しかしながら、述語が文末に立つという厳格な文法的制約に違反しない限り、その他の構成要素の順序はかなり自由であることが解明された。動詞語幹の中にはチベット語系諸語とは明らかに系統を異にするものが存在し、また述語形式（助動詞）や助詞の中にはチベット = ビルマ諸語の古い形式と同定できるものもあることが判明した。

第五章「複雑な構造」では構成素順序、疑問文、否定文、存在構文および所有構文、トピック＝コメント構文などを概観した。

最後の付録は参考資料である。筆者の収集になる当該方言で最も典型的なテキスト 1 篇を選んで挙げてある。つづいてナムイ語＝中国語＝英語の対照基礎語彙集を付した。当該言語の資料はこれまで公刊されているものが少ないため、歴史言語学的研究にも資するよう、中国語及び英語からも引けるように 3 種類の順序で提示した。

本論文は記述言語学的研究という独立したものであると同時に、ナムイ語の言語学的諸現象をより深く解明するため、また周辺諸言語との比較言語学的研究に発展させていく可能性の基盤を与えるものでもある。本論文ではできる限り多くの言語学的現象についての記述を目指したが、取り上げた現象は今後全てより深い解明がなされるべきものである。

論文審査結果の要旨および担当者

提　　出　　者	西田　文信
論文審査担当者	（主査）教授　千種　眞一 教授　後藤　斉 教授　齋藤　倫明
論　　文　　名	ナムイ語ゾロ方言の記述言語学的研究

本論文は、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語群に属するナムイ語ゾロ方言を音韻・形態・統語の領域にわたり包括的な記述をめざした研究である。論文は全五章からなり、筆者自身のフィールド調査により蓄積されたデータを用いて、各章で可能な限り多くの現象について従来の研究ではなし得なかった網羅的にして精緻な記述を実現している。

第一章「序論」では、ナムイ語の系統的位置づけを研究史の流れの中で概観し、併せてナムイ語話者の社会言語学的状況を紹介して、少数民族の現状に関する最新の報告となっている。第二章「音論」では、ナムイ語の音声および音素体系を記述・分析している。特に声調の詳細な音響分析に基づいて、ゾロ方言を語声調言語と規定し、その声調規則を提示したことは新しい知見である。第三章「語及び名詞形態論」ではナムイ語の派生形態論的過程として接辞、複合、重複を指摘する。さらに名詞の分類に続きその下位範疇として代名詞、数詞、類別詞を論じ、名詞項の格標示に関しては自動詞主語、他動詞の主語および目的語の標示に加え、その他の意味論的・語用論的な役割が主に文の構成要素の順序とさまざまな後置詞により標示されることを論じている。動詞や動詞句に関連する文法現象を扱う第四章「動詞形態論」では、ナムイ語は膠着語で SOV の基本語順を有するが、述語が文末に立つという厳格な制約に違反しない限り、その他の構成素の順序はかなり自由であることを明らかにした。さらに、結合価の増減手段の提示からナムイ語に重要な動詞複合体の形態に関わる否定標示、完了相・未完了相・状態変化相・継続相や前望相・起動相・反復相などのアスペクト標示、義務的または認識的なモダリティ標示、直説法・命令法・疑問法・禁止法・感嘆法・勧奨法・許可法・願望法からなる叙法標示の多彩な方法と多様な意味用法に至る記述は詳細であり、本論文の中でもナムイ語の興味深い現象を提示した中心的部分といえる。最終の第五章「様々な構造」では、名詞句、動詞複合体および節を構成する要素の順序を明確に定式化した点が注目される。さらに単文のうち特に疑問文の極性疑問文・代替（選択）疑問文・疑問詞疑問文について記述し、さらに否定文に関しては否定辞の位置がスコープに影響を与えることが明らかにされた。

以上、本論文に展開された記述言語学的手法に徹したフィールド調査の成果は現代の言語理論にも資する貴重なデータに満ちており、ナムイ語ゾロ方言に対して現時点で望み得る記述的妥当性を達成していると判断される。本論文はその基礎的なデータを提供することによって、周辺諸言語との比較言語学や言語類型論を始めとする言語学諸分野の発展に寄与するところ多大なるものがある。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。